

---

Alicia Florence

相庭 ゆうき

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

A l i c i a F l o r e n c e

### 【Nコード】

N 9 5 7 2 C

### 【作者名】

相庭 ゆづき

### 【あらすじ】

ARIAのファンフィクションです。アリシアさんを想う一青年のお話……だと思えます。

詩篇「白き妖精」（前書き）

この作品はファンフィクションです。実在の人物・団体・作品等にものごく関係があります。が、一切関係がないものとしていたただいたほうが、作者の気が楽になります。

詩篇「白き妖精」

雪より生まれし妖精は  
白玉の肌に光を帯びて  
あさもやにけぶる水上を  
ゆるりゆるりと舞い踊る。

ふわりふわりと咲き乱る  
金粉を振りまく艶やかな髪  
薄紅の頬、紅玉の唇  
春の日和の草原に  
降臨せしは天女の微笑。

しなやかなる柳の腕  
風にしやなりとひらめけば  
灼熱の太陽の怒りに負けず  
水面を走るその姿  
獅子にも似たる心地して  
見るものすべて膚とならん  
誰が呼んだか  
白き精。

ゆらゆらゆれるなみのまに  
ひらひらおつるらくよつの  
金色の道を進むは  
水の精  
夕闇にかげる横顔に  
ちぢに乱れし我が心  
いかにせんとて

ただ泣くばかり。

吐く息白く氷りつく

冬の朝とて水の上

今日もあなたはほほえみて

先駆ける春の香りの紅梅の

雪溶けの風を送り出す。

雪より産まれし妖精は

白玉の肌を光を帯びて

あさもやにけふる水上を

ゆるりゆるりと舞い踊る。

雪より産まれし妖精は

冬より春のよく似合う

素敵な笑顔の

ウンディーネ。

詩篇「白き妖精」(後書き)

いきなり下手な詩でごめんなさいでした。次回からは小説になるはずです。出たとこ勝負の更新不定期ですが、よろしければよろしく  
お願いします。

## 第一話

どこからか春の匂いが漂ってくる、まだ肌寒い冬の朝。

遠くに響く汽笛を聴きながら、寄せては返す波をアリシアは見ていた。隣ではアリアが同じように海を見つめながら、ほっとみるくをすすっている。

アリアとは猫の名である。火星猫という火星固有の種で、その知能は人間のそれに匹敵すると言われている。

アリシアの所属するARIAカンパニーや、他のウンディーネ業界の会社では、青い瞳をもつ火星猫は、航海安全のお守りとして、社長の座にすえられ大切にされるのが慣習だ。

ウンディーネ 水先案内とは、観光業の名である。古代地球の水上市ウ、エネチアを模して火星に作られたネオウ、エネチアの、街中に張り巡らされた水路の隅々までを案内してまわる。

女性にだけ許されたネオウ、エネチアの看板職であり、水の精霊の名を冠してウンディーネと呼ばれている。

「社長、そんなに身を乗り出すと危ないですよ」

アリシアはそう言うと、アリアを胸もとに抱き寄せた。

「ぶいにゅ」とアリアが鳴くと、アリシアも笑う。

「ええ、本当にいい天気ですね」

雲一つない青空と、海の蒼さが綺麗なグラデーションを描き、水面は陽光にきらめいている。

さわさわと吹く風は、少し冷たいけれど、暖炉の熱気から抜けるとほどよい心地よさである。

アリシアは目を細め、穏やかな一日の始まりに感謝を捧げた。

と、突然アリシアを呼ぶ声が部屋を越えて玄関口の方から聞こえた。

「大変ですー」

どこかのんびりした口調でそんなことを言うので、アリシアはつい笑ってしまふ。

「あらあら、どうしたんでしょうね？　アリア社長」

そう言いながら玄関に向かうアリシアに、アリアは「ぶーいにゅっ」と応えた。

玄関口で掃き掃除をしていた灯里は一枚の紙切れをアリシアに渡す。

「風で飛んできたのか、このへんに最初からあったのかは、わからないんですけど……落ちてたんです」

灯里が興奮した調子でまくしたてる。まくしたてると言ってもおっとりしたところのある灯里の話し方ではあまり緊張感が伝わらない。

アリシアはくすくす笑いながら紙に書かれたものを見る。



「詩、かしら」

その詩を読む少しの間、沈黙が流れる。灯里は、アリシアの胸を離れたアリシアの手を取り、もてあそびながらその様子を固唾を飲んで見守っていた。

灯里は ARIIA カンパニーに下宿しながら働く見習いウンディーネである。

少しおつちよこちよいで、マイペースなところは、欠点というよりは長所であった。周りの心をなごませてくれる、独特の暖かさ。

アリシアの読み終わったのを見てとると、灯里は待ちきれないように言った。

「アリシアさんのことですよね？」

「素敵な詩ね」

自分のことを書かれているのに少しの気恥ずかしさもないのか、アリシアはうっとりつつぶやく。

もしかしたら自分のことだと気付いていないのかもしれない。

アリシアもなかなかどうしておっとりとしたものであるのだから。

「ですよねえ。アリシアさんへの綺麗な想いがあふれて、私にも伝わってきますもん」

ほくほくと自分が誉められたように頬を染めて笑う灯里に、アリシ

アも嬉しそうにしながら尋ねる。

「でも誰からかしらね。風で飛んできた、ということは落とし物かしら」

ハッと、口もとに手をあて灯里が言う。

「もしかしたら……アリスアさんには見られなくなかったかもですね……」

アリスアはしばらく文面を眺めながら、考えるそぶりを見せる。そうねえと呟き、それからニコリと笑って、灯里に差し出した。

「それじゃあ私は見なかったことにしておくわね」

灯里は理解がいかない様子で首を傾げた。

「もし誰かが探しにきたりしたら、灯里ちゃんが渡してあげて」

「ああ、その人に、アリスアさんは見てないことにするということですか」

こくりとうなずく灯里に、うふふと笑う。

アリスアはARRIAカンパニーの玄関先の小物入れにその紙切れを入れた。

「ここにいれておくわね」

分かりました、と灯里は元気よく応えた。

## 第二話

その日の午後のこと。灯里は友人との合同練習に向かい、アリシアは仕事の合間に買い物に出ていた。

アリシアが袋を小脇に抱えて、ARIAカンパニーに戻ると、そこに一人の男がいた。

玄関前で地面に這いつくばるようにして首をキョロキョロ動かしている。アリシアは明らかに物を探しているその男に見覚えがあった。

「リッツさん」

後ろから声をかけるとビクンとはねあがり、直立の姿勢で硬直する。ギギッと音がするほどぎこちなく首を回し、ちらりとアリシアを確認するとすばやく首を戻した。

「どうかなされたんですか」

前に回りこむと、リッツはぐるりと百八十度回転し体を背けてしまふ。

「探しものならお手伝いしましょうか」

そこまで言うてからハッと気づく。

今朝の詩はこの人のものかしら。

どうしましゅうとアリシアが思案していると、リッツがうつ向き加減にこちらを向く。

「い、いいいい天気、ですね」

考えはさておき、アリシアは天使のような笑顔で応える。

「ええ。今日は本当にいい天気ですねえ」

あは、あははときこちなく笑うリッツ。うふふと眩しい笑顔のアリシア。

「ああ、あの……」うっ、のっ、辺りにっ」

「はい」

アリシアが髪をよけながらうなずくと、フローラルの香りがあたりに咲く。

その香りにあてられたのか、顔を真っ赤に蒸気させたリッツは一歩とあとずさった

「や、やっぱりなんでもないですっ。さよならっ」

リッツはペコリと一礼し、脱兎のごとく街角に消えた。

あまりの素早さに一瞬あっけにとられてから、あらあらとアリシアは微笑んだ。

## 第三話（前書き）

少し長くなってしまいました。がよろしければおつきあいください。

### 第三話

その日の昼下がりに、灯里と藍華はサン・マルコ広場のカフェ・フロリアンで昼食をとっていた。

「あに？ もう一度言ってみなさいよ」

灯里の言葉にあきらかに機嫌を損ねた様子の藍華がピザを口に放り込んだ。

藍華は灯里と同じく見習いウンディーネで、ARIAカンパニーではなく大手老舗の姫屋に所属している。姫屋の跡取り娘でお嬢様ではあるのだが、その人柄はどちらかといえば“お嬢”である。

「だからね、アリシアさんのことを詩に書くほど好きな人がいるみたいなの」

「誰なのよ、その不貞の輩は」

藍華はアリシアの大ファンである。アリシアさんに男、などは考えられない事態のようだ。

「いやそれはわからないんだけどね……」

灯里が今朝の次第を話す間、藍華はせわしげにピザを口に運んでいた。

「藍華ちゃん、それ私の……」

「気にしなさんな」

「ええ〜」

しかし、と藍華はリスのように膨らませた口をモグモグさせながら言った。

「いったい誰なんだろ？ まさかポニ男じゃあるまいし」

そう言つのと、灯里の髪が誰かに掴まれるのは同時だった。

灯里は肩にかかるほどの長さの髪を細く束ねて耳の前で垂らしている。そこを掴まれたのだった。

「相変わらず立派なもみあげだな、もみ子よ」

「もみあげじゃないですつ。暁さん」

もはやお決まりの会話を交してから図々しくも二人のテーブルに椅子を置く。

この男 出雲暁は火星の気候を司る仕事、火の妖精に例えてサラマンダーと呼ばれる職の見習いである。普段は浮島と呼ばれる空に浮かぶ管制塔と街を一体にした巨大な飛空船に住んでいる。

腕を組みでんと構えると藍華を見た。

「俺様がどうかしたか？ ガチャペンよ」

ポニ男とはこの男のことを言う。ポニータールのように髪を後ろで

束ねているためである。

またガチャペンとは藍華のことを言う。古代地球でかつて流行った  
‘ガチャペン’というキャラクターに藍華は似ているらしい。

しばらく暁をじっと見ていた藍華は、ふっと嘲るように笑った。

「なんだあ？ その笑いは。失礼な奴だな」

喧嘩腰が二人のコミュニケーションとはいえ、二人のそんな様子に  
灯里はハラハラしっぱなしだ。

そんな思いもつゆ知らず、機嫌を悪くした暁は灯里の皿からピザを  
つかみ口に放り込む。

「暁さんそれ私の」

「うむ。気にするなっ」

「ええ〜」

情けない声を出す灯里を背景に、二人は火花を散らす。

「じゃあ聞けけど」

「応っ」

「あんたアリシアさんのことが好きなのよね」

「お、応っ」



暁の顔に蒸気が上る。

「アリシアさんは俺様のエンジェルだが？」

顔を赤らめながらも普段通りの俺様口調を続けようとするあたりが、暁のかわいいところである。

灯里はピザを食べられたこともとうに忘れて、くすりと笑った。

「じゃあそのアリシアさんへの想いを込めて、詩を綴ったりしちゃうわけ？ どうなのよ」

「詩？ 浮島生まれ浮島育ちのチャキチャキの浮島ツ子の、燃える闘魂であるこの俺様がなぜウジウジ詩など書かねばならんだ」

ふんと鼻息荒くまくしたてる暁に、ほんと肩をすくめて見せる藍華。

「やっぱりね。この男にそんな度胸があるわけないもの」

「ぬあんだとおっ」

ガタンと椅子を倒して立ち上がる暁に動じる様子もなく、ラスト一切れのピザを口に入れながら藍華は言った。

「アリシアさんを前に、見てるこっちが恥ずかしいくらい緊張しちゃうようなダメ男に、詩が書けるわけないってことよ」

「ぐぬぬ……」

図星をさされ、いきおいをなくした暁はうなつた。それからいくぶんしょんぼりした様子で椅子を立てなおして、今度は灯里に話しかけた。

「詩ってなんのことだ」

こちらも最後の一枚となったピザを大事なそうにかじっていた灯里が藍華にした説明を繰り返す。

「暁さんにライバル出現ですね」

最後にそうつけくわえた灯里に、暁は食いつく。

「ふん、ネチネチ詩なんか書いてる野郎に男気溢れる俺様が負けるか。そんなストーリーカー野郎の魔の手など、一刀両断にしてくれるわ」  
それを聞いた藍華が目を輝かす。

「そ　　よつ。ストーリーカーだったら大変じゃない」

ズダツと立ち上がった藍華が暁を見る。

「ポ二男、あんたなかなかいいこと言うじゃない」

当然だ、というように胸を張る暁に、灯里が口を挟む。

「ストーリーカーって……そんなじゃないと思うよ？」

ギロリと二人ににらまれて灯里はたじろぎながら理由を述べた。

「だってあんなに素敵な詩を書く人だもん。きつと草原に吹く春の風のように爽やかで素敵な人だと思っなあ」

「恥ずかしいセリフ禁止！」

ずびしつと藍華が灯里の額を突く。あうと涙目の灯里に暁がすみみを効かせた声で言う。

「ではもみ子はこの俺様より、そのひ弱な、風が吹いたら飛んじまうようなネクラ野郎に負けると言うのだな？」

「えっ、いやそんなことは……っ。ていうかそれは詩人さんに失礼ですよ」

ガタンと再び椅子を弾き飛ばして立ち上がる暁。

「こうしてはおれん……一刻も早くアリシアさんをお助けせねば！」

グツと拳を握る暁に、そーよそーよと藍華が賛同したその時だった。

「暁くん、ここにいましたか」

「アル君？」

いの一番に反応した藍華に、笑顔で会釈する小柄な青年　アルバ  
ート=ピットである。

アルは火星の重力を司る仕事、地の妖精に例えられノームと呼ばれる職の見習いである。

アルは灯里にも丁寧にお辞儀をして、暁に向き直る。

「待ち合わせ場所にいないので探しましたよ。幸い立ち上がってくれた暁くんの姿がすぐ見えたからよかったです」

「ポ二男となんか約束があるの？」

藍華が尋ねると、ええ、とうなずく。

「買い出しの荷物持ちをお願いしていたのですが……なにか用事でできませんでしたか」

普段地中で暮らすノームは時折地上に出ては大量の物品を買う。

暁は口をパクパクさせた。約束を破るのは浮島っ子として避けたいという思いと、アリシアさんを優先させたい思いが激しく戦っているようである。

「なによ。私に頼んでくれてもいいじゃないのよ」

藍華がなぜポ二男に、というように口を尖らせる。アルはまあまあとたしなめるように答えた。

「女性にそのようなことはさせられませんから」

藍華の頬がポツと染まる。小柄で童顔だが、アルの物腰は優しく紳士的である。

「ちょっとポ二男。あんたまさかアルくんと約束放り出すようなマネはしないわよね」

「なっ！ 俺にアリシアさんよりアルをとれというのか？」

「アリシアさんは私らにまかせて、あなたは予定通りアルくんとの買い物を楽しみなさいよ。アルくんは私をお呼びでないらしいから」

すこし恨みをこめてそういうと、アルが慌ててふためいてフォローする。

「いえ決して藍華さんと買い物がしたくないとかそういうわけではなくてですね……」

「藍華ちゃん、少しいじわるだよ」

灯里がやんわりとたしなめる。藍華は照れ隠しのように灯里に号令した。

「さ、ともかくアリシアさんのところに行くわよ」

「む、待たんか」

暁の声を背に灯里をぐいぐい引っ張っていく。

「午後の練習はどうするの藍華ちゃん？」

「そんなの中止よ、ちゅーし」

ええ〜と灯里の声をサンマルコ広場に響かせながら、二人はあつと  
いう間に賑わう人々の中に消えていった。

暁はなお未練がましくアリシアさんと呟いていたが、すぐに気をと  
り直してアルに言う。

「じゃあ行くか」

「ええ……でも会計忘れてますよ、あの二人」

「ぬなっ！……アル払っとけ」

「僕ですか？」

「自慢じゃないが俺様は一銭も持っていない」

「……………」

「それにアルならガチャペンやもみ子から返してもらえるだろうが、  
俺様ではもみ子はともかくガチャペンから返してもらえないかもし  
れない」

「そんなことはないでしょう」

「……みみっちいこと言うんじゃないわよ。ポニ男も男なら唇食の  
一度や二度、笑って払える人間になりなさい……………」

藍華の口真似をしてつぶやく。

「……………」

「いずれにせよ、持ってないものは出せん」

二人の消えた先をみながらそんな会話を交していると、慌てた様子で灯里が戻ってきた。

「あ、危うく食い逃げするところでした」

勘定を掴んで、灯里が照れ笑いを浮かべる。

「それでは暁さん、アルくん、よい午後を」

ペコリとお辞儀して駆け去る灯里の向こうで、早くしなさいよとせかす藍華の姿が見えた。

「もみ子も大変だな」

「藍華さんもいい子なんですけどね」

「……行くか」

「ですね」

二人の男もまた、サン・マルコ広場をあとにした。

### 第三話（後書き）

誤字脱字設定上の誤り（原作と明らかに違う！）等、ご指摘いただき  
けると幸いです。

ありがとうございました。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9572c/>

---

Alicia Florence

2010年10月10日20時38分発行